

淡路島プロジェクト -地域交流拠点「I」の提案-

三田村哲哉 (兵庫県立大学), 橋本卓磨 (ooc inc.)

キーワード: 建築設計, リノベーション, コンバージョン, デザイン, コラボレーション

1. プロジェクトの概要

淡路島地域交流拠点「I」の要件は、淡路市のある街区の一角にある木造平屋建ての住宅 (68 m²・築年数不明) を、地域の交流拠点の用途変更によって、街の活性化の基軸となるような場所を計画することであった。2022年2月頃に対象となる建築物の所有者の方から、淡路島を拠点に建築設計活動を展開する橋本卓磨氏に依頼があり、この計画の意図と用途について最初の打ち合わせを行った。兵庫県立大学はその後、橋本卓磨氏より建築設計のプロセスを地域コミュニティに開く機会と、学生の実務設計への理解を深める機会の提供というご提案を頂き、研究室の学生と共同で建築コンバージョンを提案することを決定した。本計画案は、地域交流拠点という抽象的な用途であったため、実際の企画や運営を推進していくプロジェクトマネージャーが必要であった。そのため、淡路島の事業者と島内外の学生や若手社会人を繋いで新しい価値を創る未来共創型プラットフォームである「淡路ラボ」と、行政・民間組織・不動産会社など、暮らしにまつわるステークホルダーと連携し、移住者と地域住民をつなぎ・まぜる「NPO 法人島くらし淡路」が、プロジェクトマネージャーとしてソフト面のデザインを担当して下さった。ハード面のデザイン担当者が三田村研究室の学生で、これらの2団体が連携し、実際の使い方など、どのような設備や空間が必要かを協議して進めていくことが決定した。

2. 現地調査

2022年4月に施主、三田村研究室、淡路ラボ、島くらし淡路の各団体のプロジェクトメンバーが顔合わせを行い、この事業対象となる建築の実地調査を行った。当日は、街を1時間程度散策し、街の全体像と街区の構成を把握し、その後で該当の建築の調査を行った。対象の建築物は築年数50年以上と推定されており、耐震基準を満たしていない。また部材の損傷箇所も幾つか見られたため、筋交いなどの構造体や基礎補強を前提とした改修が求められた^{注1)}。また、トタン葺外壁の趣のある錆や、天井裏の立派な丸太梁など、建築意匠の側面から保存すべき箇所も多々見られた。

施主の要望は既存建築の歴史的な風合いを残しながら新しい価値を与えることが設計の要件として提示された。



図2.3 伊勢見屋の現地写真 橋本卓磨 撮影

3. オンラインによる設計エスキス

橋本卓磨氏と三田村研究室は、現地調査の翌月から隔週でオンラインによる設計エスキスを行った。設計提案の具体的な方法は、まず街にあるべき場所の在り方をコンセプトに案を作成して、そこから空間や形態へと落とし込んでいくように進めた。橋本卓磨氏による学生の提案に対するコメントや指導はオンラインやメールを駆使して実施され、設計提案が示す通り、学生の設計教育に非常に大きな効果が表れた。(図4)

橋本卓磨氏の役割は非常に大きく、学生の設計提案の進捗の確認と、それと並行して施主との打ち合わせも進めて下さり、設計提案の方向性に齟齬が生じないように調整を図る建築プロデューサーの立場に立ったものであると考えられる。

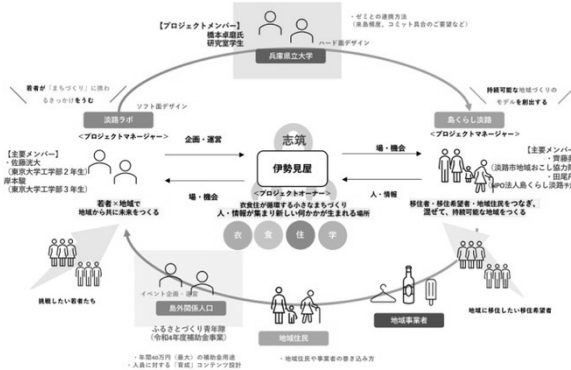


図1 プロジェクトの座組 淡路ラボ・島くらし淡路作成

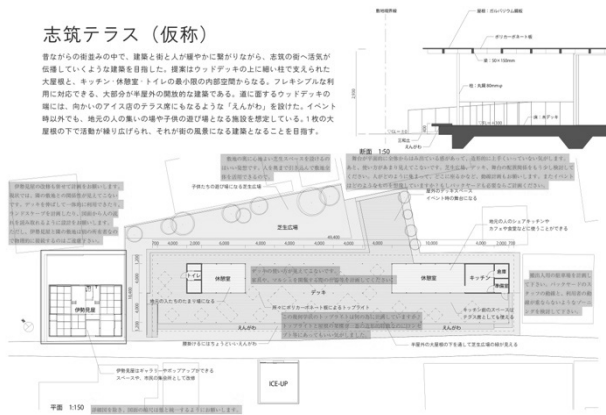


図4 矢能敏成 作成の上に橋本卓磨氏が添削

4. 最終プレゼンテーション

設計開始は5月で、中間講評会が7月に開催され、最終プレゼンテーションは8月末に開かれた。最終発表は現地とオンラインによるハイブリッド形式で実施され、各学生の提案の発表は10分、質疑応答は10分程度で、合計5名の学生が自らの建築提案を発表した。講評者は、現地淡路島に集まった施主を含む建築分野関係者3名、「淡路ラボ」他関係者を含む地域の方々7名で、多方面からさまざまな意見を頂いた。

特に地域住民や地域団体の方々から下さったご意見は、実際にその場所に住んでいるからこそ生まれる提案に対する質疑が多く、学内の講評会では得ることができない貴重な機会であった。

5. 今後の展開

今後の方針は、最終プレゼンテーションを踏まえた上で、実際の改修や兵庫県立大学の学生との関わり方を協議している段階にある。施主や地域の方々の意見は学生にとって貴重な機会であり、こうした実際の建築設計への参画は、設計教育の面でも大変有益であることが再確認された。一方、今年度の反省点は、学生が淡路島に来島できる回数が少なく、施主や現地団体との連携が充分でなかったことが挙げられる。その要因には、物理的な距離と宿泊場所の確保が困難であったことが考えられる。



図5.6 最終プレゼンの様子 柏木知恵子 撮影



図7 岩本晃典 作成

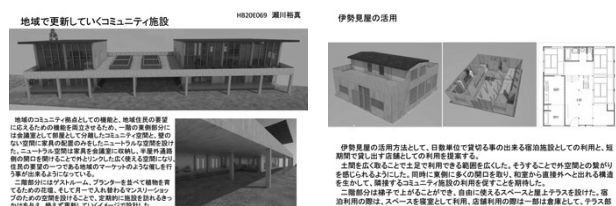


図8 瀬川裕真 作成

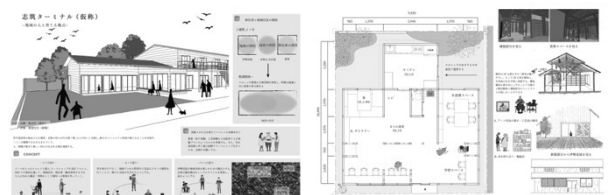


図9 川上皓之 作成

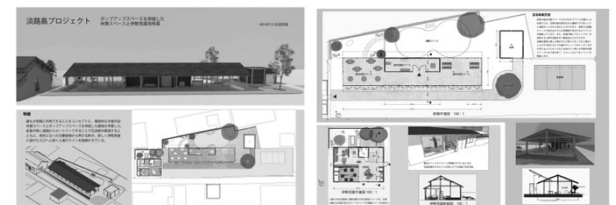


図10 松田英美 作成



図11 矢能敏成 作成

今後、現地への訪問頻度を増やしつつ、オンラインでも十分に連携可能な方法を模索する予定である。こうした建築実務を中心とした設計活動は施主と地域住民、地域交流拠点の関係者の皆様のご支援の下、地域貢献の側面のみならず研究面と教育面に非常に大きな効果があり、今後もその方法を改善し、淡路島地区と兵庫県立大学が継続的な連携を図ることが求められている。

注釈

注1) 市町が実施する簡易耐震診断を参考に調査。

謝辞

柏木知恵子氏、淡路ラボ、島くらし淡路に謝意を表す。